

シリーズ「古代文明を学ぶ」

アンデス文明 ガイドブック

松本雄一 [著]



新泉社

01	アンデス文明とは	4
02	アンデスという環境	8
03	アンデス文明の展開と時代区分	12
04	先土器時代の神殿	16
05	神殿を造りつづけた人々	20
06	チャビン・デ・ワンタル遺跡	24
07	北高地の巨大神殿、クントウル・ワシとパコパンパ	28
08	神殿を造ることによって社会が変わる	32
09	モチエ…アンデス最初の国家	36
10	ナスカ…地上絵を造った人々	40
11	ワリ…インカに先立つ帝国	44
12	宗教都市ティワナク	48
13	シカン…北海海岸の黄金文化	52
14	チムー王国の首都チャン・チャン	56
15	インカ帝国の実態1 文書資料と考古学	60
16	インカ帝国の実態2 政治経済システム	64
17	インカ帝国の実態3 地方支配と帝国の終焉	68
18	マチュピチュはどのような遺跡なのか	72
19	文字なき社会の情報メディア	76
20	日本のアンデス研究1 その歴史と現状	80
21	日本のアンデス研究2 考古学者と現地社会	84
	もっとアンデス文明を知るために読んでほしい本	88
	アンデス文明を知るための博物館	90

01 アンデス文明とは

南アメリカ大陸の西側に南北約8000キロメートルにわたってはしるアンデス山脈とその周辺地域の中で、古代文明と聞いて漠然と思い浮かぶものは、現在のペルー共和国とボリビア多民族国の一部に集中しています。有名なマチュピチュ遺跡やナスカの地上絵、あるいはシカン文化のきらびやかな副葬品などをあげることができるでしょう。本書で扱う「アンデス」はおもにこの地域をさしています。

「アンデス文明」の名で多くの人が連想するものに「インカ帝国」があります。しかし、インカ帝国の歴史は、15世紀後半から1532年にスペイン人によって征服されるまでの一世紀に満たないものです。「文明」という概念が、高度に洗練された芸術や科学とそれが反映された巨大な建造物や都市などによって定義されるのであれば、アンデスにおいてその起源はインカ帝国の成立よりはるか以前にさかのぼります。特に古代文明のイメージの一つである見事な壁画や装飾がほどこされた巨大な神殿[†]は、インカ帝国よりも4000年以上前に出現したことが明らかになっています。

それからインカ帝国まで、アンデスの各地で数多くの個性豊かな文化が興亡を繰り返し続けました。アンデス文明とは、この地域で4000年以上にもわたって盛衰した社会すべてが織りなす歴史的過程であるといえるでしょう。「アンデス文明」とは、インカ帝国とそれ以前に各地で栄えた多様な

†この本では神殿を、人々が集まって祭祀、儀礼をおこなう場と定義しておく。神殿には通常の住居とは異なる規模の大きな建築がとれない、そ

地域文化を含むものになります。

ここで、アンデスに展開したさまざまな社会に共通する、アンデス文明の特色というべきものを考えてみましょう。ポイントはいくつあります。

第一に、他の文明から影響を受けることなく出現した文明であることがあげられます。アンデス文明はメソポタミア文明、古代エジプト文明、古代中国文明、インダス文明、メソアメリカ文明とともに、数少ない一次文明（他の文明の影響を受けずに成立した文明）の一つなのです。

第二に、アンデス文明には他の文明において非常に重要であったいくつかの要素が存在しませんでした。よく知られているものとして、文字、鉄、車輪があります[†]。つまり、記録手段、道具の材料、移動手段が、他の文明とは大きく異なっていたのです。

第三に、アンデス地域の自然環境の多様性があげられます。海岸砂漠からアンデス山脈の高地、そして熱帯雨林に至る多様な環境が存在するアンデスでは、それぞれに適応した集団がさまざまな環境利用のあり方を生み出し、環境間で集団の交流が生まれました。その過程で各地にさまざまな文化が興亡を繰り返し続けたのです。

このようなアンデス文明の展開を、最終的にインカ帝国の出現にいたる直線的な進化の過程としてとらえることは不可能です。その実態の解明には、それぞれの社会に焦点をあてることが必要となります。

アンデス文明の独自性は、それぞれの社会を「国家」などのわれわれの知るカテゴリーに押し込めることを困難にしています[†]。このことは逆にいえば、アンデス文明を知ることには、当たり前だと思っていた古代文明、あるいは人間社会一般のイメージが覆されることでもあるのです。

の建造には多くの人々の協働が必要だった。つまり神殿とは、祭祀、儀礼をおこなう公共の建築であり、公共祭祀建造物ともいうべきものである。

†同じアメリカ大陸のメソアメリカ文明においても、鉄と車輪は存在しなかった。

†アンデスでは巨大な神殿が王をはじめとする権力者の存在なしに出現した。このような社会を「国家」と呼ぶことには無理がある。

01 多様なアンデス文明

南アメリカ大陸に展開したアンデス文明は、人類史上数少ない一次文明であり、紀元前3000年の神殿の出現から16世紀のスペイン人によるインカ帝国征服にいたるまで、多様な社会が興亡を繰り返した。



- ①北高地の巨大神殿、クントゥル・ワシ遺跡〔形成期中・後期：紀元前1000～前250年〕
- ②アンデス最初の国家、モチェの太陽の神殿（ワカ・デル・ソル）〔モチェ文化：紀元前後～紀元後600年〕
- ③宗教都市ティワナクのカラササヤ神殿〔ティワナク文化：紀元後500～1000年〕
- ④ナスカの地上絵〔ナスカ文化：紀元前200～紀元後600年〕
- ⑤マチュピチュ〔インカ帝国：紀元後1400～1532年〕

⑥世界の一次文明

これらの文明はほかの文明の影響を受けずに独立して発生した。



⑦本書で扱う中央アンデスの地域区分



02

アンデスという環境

南アメリカ大陸の太平洋側を縦断するアンデス山脈は、中央アンデスを西から、乾燥した砂漠である海岸地帯（コスタ）、アンデス山脈に対応する山地地帯（シエラ）、そして山脈を下った東側の広大な熱帯雨林地帯（モンターニャ／セルバ）に分断します。また、アンデスは緯度では亜熱帯に属しているため、標高が3000メートル以上の高地でも居住が可能です。アンデスの気候は山地における季節の変化をもとに、大まかに雨季（11～4月）と乾季（5～10月）に分けることができますが、南北方向に長く伸び、東西方向に砂漠、山地、熱帯雨林が隣接して並ぶように分布するアンデスにあつては、地域ごとに状況がまったく異なります。

アンデス山脈の東斜面は、熱帯雨林から高温多湿の風が吹き込むため、一年を通じて気温と湿度が高く、これに対してアンデス山脈の西斜面の海岸部は、沖合を流れる寒流、フンボルト海流[†]の影響でほとんど雨が降らず、砂漠が広がっています。ただし、山地に降る雨が川となって太平洋に注ぎ込んでいるため、海岸部でも川のそばは緑が広がっています。また、砂漠であっても濃霧が立ち込めることによって、一時的にロマスと呼ばれる草原地帯が広がる場所もあります。ただし、その時期は先述の区分では乾季に対応し、海岸と山地とでは雨季と乾季が逆になります。

そして、ここにアンデス山脈による高低差が加わることで、大きく異なる環境帯が非常に近い距

離に分布するという状況が生じます。ペルーの首都リマを出て、海岸の砂漠からアンデス山脈を越えて熱帯雨林に向けて車を走らせると、数時間ごとに周囲の風景が植生や地形を含めてどんどん変化していくことに驚くことでしょう。

アンデスではこうした高低差を利用して、多様な環境帯の資源を利用する「垂直統御」と呼ばれる特有の環境利用のあり方が生み出されました。垂直統御にはさまざまなバリエーションがありますが、たとえばアンデス山脈の西斜面標高3400メートルくらいのところに位置するある村では、上の高地でラクダ科動物（リャマ、アルパカ）の放牧とジャガイモをはじめとする根菜類を栽培し、下の温暖な谷間でトウモロコシなどを栽培することが知られています。高地と谷間は1日以内に移動することが可能です。

こうしたアンデス山脈の高低差がもたらした、狭い範囲内にきわめて多様な資源が存在している状況を最大限に活用しようとする人々の営みが垂直統御と呼ばれるものです。

アンデスの自然環境についても一つ述べておかなければならないのが、太平洋岸の海水温の異常な上昇によってもたらされるエル・ニーニョと呼ばれる現象です。貿易風が弱くなることを原因の一つとした海流と大気の変更によって、通常はきわめて降雨量の少ない海岸部において、豪雨とそれにともなう洪水や土石流、そして海流の変化による魚介類の大量死などの災害が引き起こされるのです。

本書で扱う先スペイン期[†]の社会においてもエル・ニーニョ現象への対応はきわめて重要であったと考えられ、設備や建築によって対応を試みた事例があります[†]。また一方で、さまざまな文化が衰退する要因としてエル・ニーニョ現象を位置づける説も数多く提示されています。

[†]南極海から南アメリカ大陸西岸を北上する寒流。別名ペルー海流ともいう。

[†]本書では、スペイン人によるインカ帝国の征服（1532年）以前の時期を全体として扱う場合に先スペイン期という言葉を用いる。

[†]土石流を防ぐ壁や、建築の造り替えなどの事例が確認されている。また、エル・ニーニョの時期に大きな儀礼や居住地の移動がおこなわれた可能性も指摘されている。

02 アンデス山脈の高低差が生んだ多彩な環境

アンデスはだまかに、西の海岸地帯、中央の山地地帯、東の熱帯雨林地帯からなるが、アンデス山脈に由来する高低差と合わせてきわめて多様な環境が分布している。アンデス文明の多様性もまた、このような地域的特色と密接に関わっていた。



⑨プーナ：標高4000mを超える気候帯。在来種のリマヤアルパカに加えヒツジなどの放牧が盛んになる。



⑩コルディエラ：アンデスの冠雪地帯。アンデスの人々にとって山は重要な信仰の対象であった。

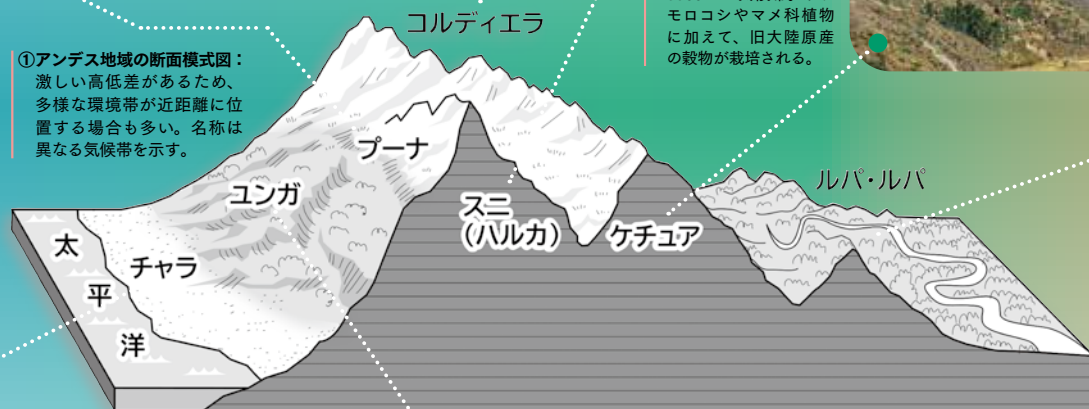


⑦⑧スニ：標高3500mを超える気候帯。ジャガイモをはじめとする根菜類や雑穀であるキヌアが栽培される。



⑥ケチュア：標高2300～3500mの気候帯。トウモロコシやマメ科植物に加えて、旧大陸原産の穀物が栽培される。

①アンデス地域の断面模式図：激しい高低差があるため、多様な環境帯が近距離に位置する場合も多い。名称は異なる気候帯を示す。



海岸地帯 (コスタ)

山地地帯 (シエラ)

熱帯雨林地帯 (モンターニャ/セルバ)



②③チャラ：アンデス海岸部の標高500mまでの気候帯。非常に乾燥している。砂漠が広がっているが、河川周辺では灌漑農耕がおこなわれている。



④⑤ユンガ：海岸砂漠を越えてから山地に入る標高500～2300mの気候帯。温暖な気候からトウモロコシや果物など農作物の栽培が盛んである。



④⑤ユンガ：海岸砂漠を越えてから山地に入る標高500～2300mの気候帯。温暖な気候からトウモロコシや果物など農作物の栽培が盛んである。



⑪ルパ・ルパ：アンデスの東斜面にあたる熱帯雨林地帯。羽毛、毛皮、木材などの資源に加え、コカの産地としても重要であった。



⑫複数の気候帯にまたがる高低差の激しい地域では、段々畑の上と下で異なる作物を栽培する場合もある。

03

アンデス文明の展開と時代区分

南アメリカ大陸におけるもとも古い人間活動の痕跡は、チリ南部のモンテ・ベルデ遺跡で確認されています。調査者たちはおよそ1万4500年前頃には人間が居住していたと考えています。ユーラシア大陸から北アメリカ大陸に渡った人類は南アメリカへと拡散し、その後、長い間にわたって狩猟や漁労、そして植物資源の採集を組み合わせることで多様な環境に適応しました。やがて植物の栽培と動物の家畜化が始まり、定住生活する集団が増加していったと考えられます。

紀元前3000年頃にアンデスの海岸部において、そしてそれよりやや遅れて山地において大きな変化が生じます。人々は協力して神殿というべき公共祭祀建造物を生み出し、その神殿を中心として結びつけられるようになったのです。神殿の出現は、社会が複雑になり文明が形成される、まさにその端緒として位置づけられることとなります。

神殿が社会の中心であったこの時代は形成期と呼ばれ、紀元前後まで3000年にわたって続くこととなります。本書では「形成期」「地方発展期」「ワリ期」「地方王国期」「インカ期」という時期区分を用います。以下では、神殿の出現に始まるアンデス文明の展開を、時代区分と合わせて大まかにみておくことにしましょう。

形成期（紀元前3000年～紀元前後）は先に述べたとおり、神殿を中心として社会が統合されて

いた時期です。神殿を中心として遠く離れた地域の集団が交流して広範囲にわたるネットワークが生まれ、集団の中に社会的あるいは経済的な差異が生まれた時期といえるでしょう（04～08項）。

地方発展期（紀元前後～紀元後600年）は、神殿を中心とした広範囲のネットワークが崩壊し、地域ごとにさまざまな社会が展開した時期と位置づけられます。代表的なものとして、アンデス最初の国家とされるモチェ文化（09項）と地上絵をつくり上げたナスカ文化（10項）があげられますが、両者の間に交流は確認できず、その社会の仕組み自体も大きく異なるものでした。

ワリ期（紀元後600～1000年）は、アンデスの広い範囲がワリという政体（11項）の影響下にあった時期とされます。ワリはインカに先行する帝国であったかという点で議論が続いています。同時期に南のティティカカ湖周辺ではティワナク文化が栄えました（12項）。ワリとティワナクは、宗教や物質文化に共通性を示しながらも異なる原理で統合されていた社会であったと考えられます。地方王国期（紀元後1000～1400年）は、ワリ衰退の後、各地で国家が展開した時期です。本書で扱うシカン文化（13項）やチムー文化（14項）が代表的なものとして知られていますが、国家と定義することができないさまざまな地域社会が展開した時期でもあります。

インカ期（紀元後1400～1532年）は、アンデス文明の展開で最後に位置しています（15～17項）。アンデスにおいてかつてない広い領域に影響下に治めたインカ帝国に関しては、これまで征服者であるスペイン人が残した文書資料を中心として研究が進んできました。しかし、近年では考古学データによる検証と議論が進んでおり、従来のインカ帝国をめぐる常識が覆されつつあります。インカ帝国の遺跡として世界的に有名なマチュピチュ遺跡においても、近年、新たな事実が続々と明らかになっています（18項）。

03 アンデス文明の展開と時代区分

本書では、神殿の発生からインカ帝国の滅亡まで、4000年以上に及ぶアンデス文明の展開を扱う。ここでは、本書で扱われるアンデスにおける地域区分と年表を提示し、それぞれの文化の変遷の見取り図を提示しておきたい。

①アンデス文明の展開

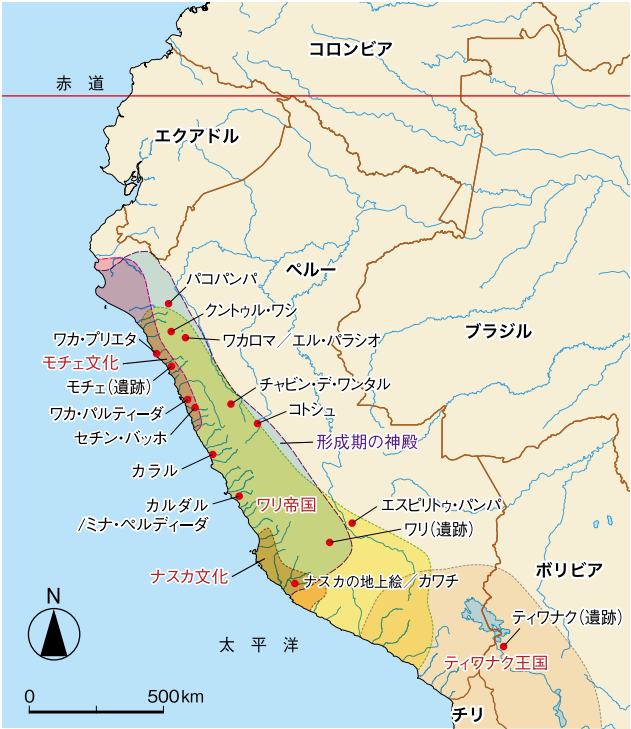
(簡略化した概念図。正確な年代は各項参照)

編年	北海岸	北部中央海岸	中央海岸	南海岸	北高地	中央高地	南高地	ティティカカ湖周辺
後1500	インカ			インカ帝国 15~17		(マチュピチュ) 18		
後1000	地方王国期	チム文化 14	チャンカイ文化	イカ文化	チャチャボヤ	カハマルカ文化	チュバイチュ	ルバカ
後500	フリ期			フリ帝国 11				ティワナク文化 12
1	地方発展期		リマ文化	ナスカ文化 10	カハマルカ文化	ワラス文化	ワルバ文化	プカラ文化
前200	末期	モチェ文化 09						
前500	後期	ガジナソ文化						
前800	中期	サリナール文化						
前1000	形成期							
前1200	前期							
前1500								
前2000								
前2500								
前3000	古期							

※カッコ内は遺跡
※四角囲み数字は本書項番号

②本書で扱うおもな文化の 地理的範囲①

(形成期〜フリ期)



③本書で扱うおもな文化の 地理的範囲②

(地方王国期〜インカ期)

